

定家本系『紫式部集』と定家筆断簡

——実践女子大学本の現状報告・二——

横井 孝

一 定家筆切の研究史

一方には、実践女子大学本『紫式部集』に藤原定家自筆本の形態を一字も違えず書写したと称する奥書があり、もう一方には定家筆の古筆切がある。この両者の関係については、南波浩が『紫式部集の研究』校異編（笠間書院、一九七二年九月刊）に言及・紹介したほか、『古筆学大成』第十九卷（講談社、一九九二年六月刊）は五葉の影印を明示した。ただしその後、寡聞にして、深く詮索されることはなかったかと思われる。

しかし、一方にひろく『紫式部集』のテキストとして用いられることの多い実践女子大学本について、定家筆とされる古筆切との関係を検証せずに、「定家本」を標榜することはゆるされぬことではないのか。そもそも『紫式部集』

において「定家本」とは何かという問題にならざるをえない。

二〇〇九（平成二一）年一〇月、関西大学で開催された中古文学会秋季大会のシンポジウム「『紫式部集』研究の現在」にパネラーとして、その一部について発表し、さらに『中古文学』第八五号（二〇一〇年六月）に若干の調査をくわえて、論じなophilたことがある。いまそれを「旧稿」として——重複する点はあるが——、とくに実践女子大学本と断簡類との関係について検証しなおしてみたい。もとより定家筆古筆切——つまり「定家自筆本」と称してよからうか——はわずかしが残されておらず、その伝存状況を把握するのも困難をおぼえざるをえないところはあるが、いま稿者の手のとどく範囲で集めうる情報のもとに、この両者の関係を通覧してみたいのである。

旧稿にもふれたとおり、はやく古筆切について言及していたのが南波浩であった。南波は『私家集伝本書目』（明治書院、一九六五年一〇月刊）に「藤原定家筆『紫式部集』」の記載があつたことを奇貨として調査したもの、所在を確認することができなかったことをのべた後、つぎのようにいう。

……去年、山岸徳平博士のきわめて有難い御好意によつて某家秘蔵の定家筆紫式部歌切を拝見しえた。現存するのは六葉で、この点、上述の定家筆「紫式部集」とはいいがたいものであるが、例の定家流の書体による、枳形一面七行書きのものである。その一葉には、

くすたまをこすとして

しのひつるねそあらはるゝあやめ草

いはぬにくちてや見ぬへけれハ

返し

けふはかくひきける物をあやめくさ
我身かくれにぬれわたりつる

土御門殿にて三十講の五卷

とあり、また他の一葉には、

はつゆきふりたるゆふくれに

人の

こひわひてありふるほとのはつゆきは

きえぬるかそうたかはれける

返し

ふれはかくうさのみまさる世をしらて

あれたる庭につもるはつゆき

とある。前者は校本（六四）（六五）と（六六）の詞書の一部であり、後者は（一二三）（一二四）にあたる部分である。

その本文は定家本系の本文内容を伝えており、しかも（六四）（六五）（六六）、あるいは（一二三）（一二四）というふうには、家集の順序どおり記されている点からみて単なる式部の詠歌の書写ではなく、まさに紫式部集の断簡であることが察知される²。

（傍線、引用者の私意）

ここで知られるのは、

（一） 山岸徳平の紹介のもとに「某家」蔵の断簡を調査したこと。

(2) それが「六葉」であること。

(3) 「枅形一面七行書き」であること。

(4) うち二葉、①南波校本の六四・六五・六六番（実践女子大学本63・64・65に該当する）の本文、②同一二番三・一二四番（実践女子大学本122・123に該当する）の本文が紹介されていること。

などがあきらかにされているということである。

しかし、「六葉」の存在を指摘しながら、本文の紹介が二葉分だけなのはなぜか。翻刻紹介された①は手鑑「養老」に押される一葉で、戦前から影印が公表されて知られているものだが、たしかに「一面七行書き」ではあるものの、南波以後にこれを掲載した伊井春樹の稿や『古筆学大成』所掲の影印によっても「枅形」とは判定することができない。——など、南波の報告には再検討すべき点がすくなくない。

その後、『古筆学大成』第十九巻は七葉のツレの現存を指摘しながら五葉の影印を掲載した。二葉の影印を欠くが、同『大成』にはほかに例もあるように、所蔵者の掲載許可が得られなかったもののごとくに見える。この『古筆学大成』所掲の五葉と南波が調査した「六葉」が重複するか否かは、いまとなつては確認できないものの、①②として翻刻された断簡は『大成』に148・147の通し番号で掲載されたもの（同書一五三・一五四頁）にはかならない。

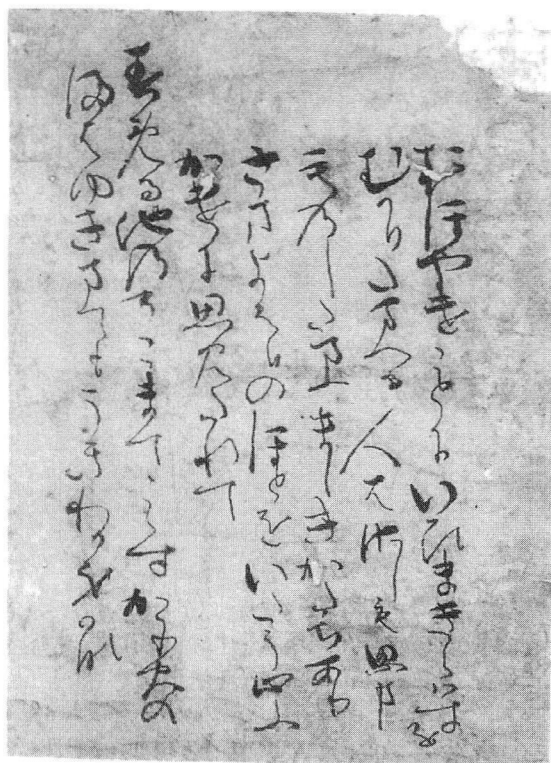
さて、ここで特筆すべきなのは、二〇〇八年秋、神田神保町の古書会館でひらかれた東京古典会に「定家歌切」が出品・展示されたことである。同会の目録には、

定家歌切

紫式部集七十二番 遠州古筆了意添状

大正八年因州池田侯爵家所蔵品入札品 一幅

とあり、「おほやけごとにいひまぎらはす……」の詞書が付せられた、実践女子大学本でいうところの67番「すめる池のそこまで、らすかり火の／まばゆきまでもうきわが身かな」の歌が記された、まさしく定家書体の一幅であった〔写真1〕。これが『古筆学大成』の図版にもれた分なのかどうか、これも現在のところ確認のすべがない。これまで展覧会に出品された定家筆切は装飾料紙が目立っていたのに対して、今回出現した一葉を実見したところ鳥の子の素紙であり、ほかのそれとツレと見なせるかどうか。躊躇する問題なしとしないかのように見えるが、これも『古筆学大成』に「料紙は鳥の子の素紙の中に、ところどころ装飾料紙を交用したようである」（四〇四頁）と指摘されていることではあった（田中登から同様の教示を得た）。



二 現存定家筆切一覧

次に、現在確認できる定家筆古筆切の概略を一覧しておこう。『中古文学』所掲の「旧稿」において「紫式部集」古筆切一覧表をあげたが、紙幅に制限があり、簡

略にせざるをえなかった。今回出現した一葉をくわえ、以下に一覧してみよう。

a 断簡 (61詞書・歌・62詞書) 個人蔵

返し

つれくとなかきはるひはあをやきの

いと、うき世にみたれてそふる

かはかり思うしぬへき身をいといた

うも上すめきくかなといひける

人をさゝて

所載文献……『源氏物語の一〇〇〇年』⁽⁵⁾に「紙本墨書／軸 一九・二 (cm) × 九・九」と紹介する。

b 断簡 (63詞書・歌・64詞書・歌・65詞書) 現蔵者不明・手鑑「養老」所載

くすたまをこすとして

しのひつるねそあらはるゝあやめ草

いはぬにくちてやみぬへければ

返し

けふはかくひきける物をあやめくさ

我身かくれにぬれわたりつる

土御門殿にて三十講の五卷

所載文献……南波浩『紫式部集の研究』^{校異 論文 稿} (前掲翻刻)・伊井春樹稿 (前掲)・『古筆学大成』

c 断簡（67詞書・歌）不明

おほやけことにいひまきはすを
むかひたまへる人はさしも思事
ものしたまふましきかたちあり
さまよはひのほとをいたう心ふ
かきに思みたれて

すめる池のそこまでゝらすかゝり火の
まはゆきまでもうきわか身かな

所載文献……平成二〇年度東京古典会『古典籍展観大入札会目録』に「定家歌切／紫式部集七十二番 遠州古筆
了意添状／大正八年 因州池田侯爵家所蔵品入札品 一幅」と紹介する。

d 断簡（86詞書・歌）個人蔵

宮の御うふやいつかの夜月の
ひかりさへことにくまなき水
のうへのはしにかむたちめ殿より
はしめたてまつりてゑひみたれ
のゝしり給さか月のおりにさ
しいつ
めつらしきひかりさしそふさかつきは

もちなからこそ千世をめぐらめ

所載文献……『国宝紫式部日記絵巻と雅びの世界』⁶⁾解説に「紙本墨書／縦二〇・〇横一四・〇」。『源氏物語の一〇〇〇年』、『古筆学大成』には「たて一九・九センチメートル、よこ一四・一センチメートル。他も大同小異である。料紙は鳥の子の素紙の中に、ところどころ装飾料紙を交用したようである。まず、図版145（横井注―d断簡）の一紙は、葦手を装飾下絵として描いている」（四〇四頁）。

^e断簡（87詞書―88詞書）徳川美術館蔵・手鑑「鳳凰台」所載

又の夜月のくまなきにわか人

たち舟にのりてあそふを見やる

なかしまの松のねにさしめくる

ほとおかしく見ゆれば

くもりなく千とせにすめる水のおもに

やとれる月のかけものとけし

御いかの夜との、うたよめとのたま

はすれは

所載文献……『徳川黎明会叢書・古筆手鑑四』⁷⁾「20.0×14.1／楮紙、金銀箔散らし、葦手下絵」（解説、四一九頁）、『国宝紫式部日記絵巻と雅びの世界』「彩牋墨書／縦二〇・〇横一四・一」、『彩られた紙 料紙装飾』⁸⁾『古筆学大成』

f 断簡（106歌～108歌）個人蔵

めつらしときみしおもはゝきて見えむ
する衣のほとすきぬとも

返し

さらはきみやまるの衣すきぬとも

こひしきほとにきても見えなむ

人のをこせたる

うちしのひなけきあかせはしのゝめの

ほからかにたにゆめを見ぬかな

所載文献……『古筆学大成』

g 断簡（122詞書～123歌）個人蔵

はつゆきふりたるゆふくれに

人の

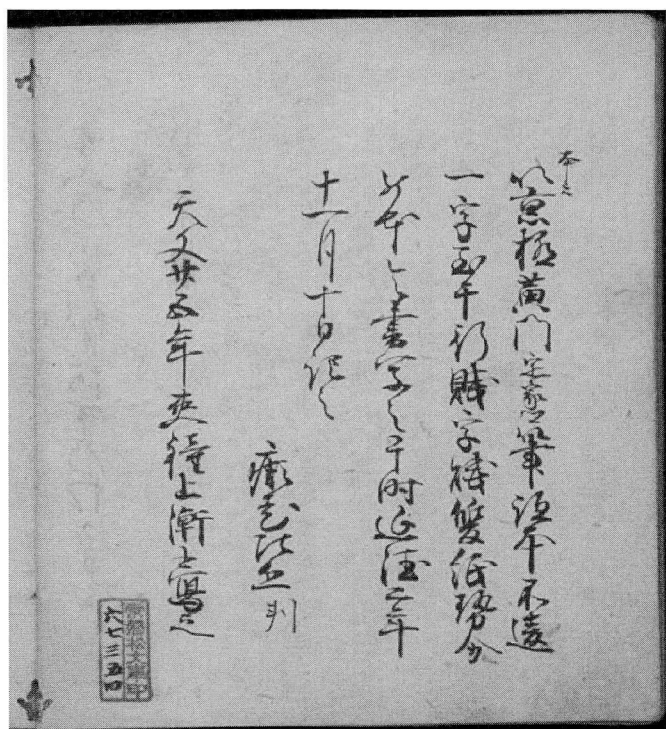
こひわひてありふるほとのはつゆきは

きえぬるかたそうたかはれける

返し

ふれはかくうさのみまさる世をしらて

あれたる庭につもるはつゆき



〔写真2〕 実践女子大学本奥書

本云

以京極黃門定家卿筆証本不違

一字至于行賦字賦雙紙勢分

如本令書寫之于時延德二年

十一月十日記之

癩老比丘判

天文廿五年夾鐘上澣書寫之

所載文献……南波浩『紫式部集の研究』（前掲翻刻）・『古筆学大成』

三 実践女子大学本『紫式部集』との比較

実践女子大学本『紫式部集』に、定家筆本を忠実に書写した旨の奥書があることはよく知られている。本誌にもすでに掲載されたことのある箇所であるが、影印をあげておく〔写真2〕。

「天文廿五年」という、存在しないはずの年紀によっていろいろ付度され疑われてきた書写奥書であったが、「京極黄門定家卿筆証本を以て、一字も違へず、行賦・字賦、双紙勢分に至るまで本の如く書写」した、という字面を額面どおりに解釈した場合、現実実践女子大学本をもつて書本の「京極黄門定家卿筆跡本」——つまり「定家本」ということになろうが——の形姿を推測する手がかりになる、ということでもある。

すでに『古筆学大成』解説で実践女子大学本と古筆切の本文の比較がおこなわれているが、ここであらためて比較検討してみよう。左の上段に古筆切本文、下段に実践女子大学本を「行賦・字賦」「一字も違へず」写してみよう。

a 断簡

返し

つれ／＼となかきはる日はあをやきの

いと、うき世にみたれてそふる

かはかり思しぬへき身をいといった

実践女子大学本『紫式部集』

返し

61 つれ／＼となかめふる日はあをやきの

いと、うき世にみたれてそふる

かはかり思そぬへき身をいといったう

うも上すめきくかなといひける
人をきゝて

b 断簡

くすたまをこすとして

しのひつるねそあらはるゝあやめ草
いはぬにくちてやみぬへければ

返し

けふはかくひきける物をあやめくさ

我身かくれにぬれわたりつる

土御門殿にて三十講の五卷

c 断簡

おほやけことにいひまきはすを

むかひたまへる人はさしも思事

ものしたまふましきかたちあり

さまよはひのほとをいたう心ふ

も上すめくかなといひける人
きゝて
「(一四ウ)

63

くすたまをこすとして

しのひつるねそあらはるゝあやめくさ
いはぬにくちてやみぬへければ

返し

64

けふはかくひきけるものをあやめくさ

わかみかくれにぬれわたりつる

つちみかとのにて三十講の五卷かう五くはん「(一五オ)
月五日にあたれりしに

おほやけことにいひまきはすをむ
「(一五ウ)

かひたまへる人はさしもおもふことの

したまふましきかたちありさま

よはひのほとをいたうこゝろふかけに

かけに思みたれて

すめる池のそこまで、らすかゝり火の
まはゆきまでもうきわか身かな

d
断簡

宮の御うふやいつかの夜月の

ひかりさへことにくまなき水

のうへのはしにかむたちめ殿より

はしめたてまつりてゑひみたれ

の、しり給さか月のおりにさ

しいつ

めつらしきひかりさしそふさかつきは

もちなからこそ千世をめぐらめ

e
断簡

又の夜月のくまなきにわか人

たち舟にのりてあそふを見やる

なかしまの松のねにさしめくる

おもひみたれて

67
すめるいけのそこまで、らすかゝりひの
まはゆきまでもうきわか身かな

みやの御うふやいつかの夜月のひか

りさへことにくまなき水のうへのはし

にかむたちめとのよりはしめたて

まつりてゑひみたれの、しりたまふ

さか月のおりにさしいつ

「(二〇オ)

86
めつらしきひかりさしそふさかつきは

もちなからこそ千世をめぐらめ

又の夜月のくまなきにわか人

たち舟にのりてあそふを見やる

なかしまの松のねにさしめくるほどおかし

ほとおかしく見ゆれは

くもりなく千とせにすめる水のおもに
やとれる月のかけものとけし

御いかの夜とのゝうたよめとのたま
はすれは

f
断簡

めつらしときみしおもはゝきて見えむ
すれる衣のほとすきぬとも

返し

さらはきみやまゐの衣すきぬとも
こひしきほとにきても見えなむ

人のをこせたる

うちしのひなけきあかせはしのゝめの
ほからかにたにゆめを見ぬかな

g
断簡

はつゆきふりたるゆふくれに

くみゆれは

87 くもりなくちとせにすめる水のおもに
やとれる月のかけものとけし

御いかの夜とのゝうたよめとのたまは
すれは

「(二〇ウ)

106 めつらしときみしおもはゝきて見えむ

すれるころものほとすきぬとも

かへし

107さらはきみやまゐのころもすきぬとも

こひしきほとにきても見えなん

人のをこせたる

108うちしのひなけきあかせはしのゝめの

ほからかにたにゆめをみぬかな

「(二四ウ)

はつゆきふりたる夕くれに人の

人の

こひわひてありふるほとのはつゆきは

きえぬるかたそうたかはれける

返し

ふれはかくうさのみまさる世をしらて

あれたる庭につもるはつゆき

これらの差異を、さらにまとめてみると、次のような結果になる。

(1) 本文の異同箇所。

a 断簡2行目「なかきはる日」——実践女子大学本「なかめふるひ」

4行目「思うしぬへき身」——「思^そしぬへき身」

g 断簡3行目「はつゆきは」——「はつつきは」

(2) 漢字・かなの表記の差異。

b 断簡2行目「あやめ草」——「あやめくさ」

5行目「ひきける物を」——「ひきけるものを」

6行目「我身」——「わかみ」

7行目「土御門殿」——「つちみかとの」

7行目「三十講の五卷」——「三十講^{かう}の五^{くはん}卷」

122 こひわひてありふるほとのはつつきは

きえぬるかたそうたかはれける

返し

123 ふれはかくうさのみまさる世をしらて」(二七オ)

あれたるにはにつもるはつゆき

c 断簡 2 行目 「思事」——「おもふこと」

4 行目 「心ふかけに」——「こゝろふかけに」

5 行目 「思みたれて」——「おもひみたれて」

7 行目 「すめる池の」——「すめるいけの」

7 行目 「かゝり火の」——「かゝりひの」

d 断簡 1 行目 「宮の御うふや」——「みやの御うふや」

3 行目 「殿より」——「とのより」

5 行目 「のゝしり給」——「のゝしりたまふ」

e 断簡 2 行目 「舟に」——「ふねに」

4 行目 「見ゆれは」——「みゆれは」

5 行目 「千とせに」——「ちとせに」

f 断簡 2 行目 「すれる衣の」——「すれるころもの」

3 行目 「返し」——「かへし」

4 行目 「やまゐの衣」——「やまゐのころも」

5 行目 「見えなむ」——「みえなん」

8 行目 「見ぬかな」——「みぬかな」

g 断簡 1 行目 「ゆふくれに」——「夕くれに」

7 行目 「あれたる庭」——「あれたるには」

(3) 改行の差異。

a 断簡 4・5 行目

b 断簡 7 行目

c 断簡 1・2・3・4 行目

d 断簡 1・2・3・4・5・6 行目

e 断簡 1・2・3・7 行目

g 断簡 1 行目

四 実践女子大学本との関係

前節で見たように、現在確認しうる古筆切・七葉五〇行を実践女子大学本と比較した結果、漢字・かなの表記の差異が二三箇所、改行箇所の差異が一八例を示した。これはかなり多い数値といえよう。仮に、実践女子大学本の奥書にしたがって、「二字も違へず、行賦・字賦、双紙勢分に至るまで本の如く書写」されたさきに、

天文二十五（一五五六？）年写本

←

延徳二（一四九〇）年写本

←

書本 京極黄門定家卿筆跡本（「旧稿」で『定家自筆本 Y』と仮称した）

と廻りえたとした場合、古筆切あるいは古筆切の冊子体の原型の定家自筆本（「旧稿」で《定家自筆本X》と仮称した）とは一致しないことになる。

とすると、定家自筆本『紫式部集』は二種、あるいはそれ以上の写本が存したのだろうか。たかだか一二〇余首の私家集である。定家が何度か書写した可能性は、さほど小さなものではないだろう。伊井春樹は「一本は実践本の親本に、一本は切断されたとすべきなのであろう」と推断し、小松茂実も「定家は写本に際して、同じ古典を一再ならず書写している。『紫式部集』の書写も、当然ながら一再ではなかったはず」という類推を披露している。古筆切を掲載した展覧会図録の解説も、たとえば「実践女子大学本……の祖本とはみなされない。……鎌倉時代にさかのぼる『紫式部集』の最古写本作品」（『国宝紫式部日記絵巻と雅びの世界』）など、ほぼ同様の見解に統一されているとおぼしい。

しかし、わずか七葉五〇行の比較ではないが、本文の異同とすべきものが三箇所しかないこと、しかもその三箇所のうち、あきらかな誤写の類を除けば、a断簡「なかきはる日」―実践女子大本「なかめふるひ」のたった一箇所しかないという事実をどのように判断したらよいのだろうか。

「旧稿」では、a断簡とb断簡が隣接する本文を記していることから、

① a断簡が実践女子大学本の61番詞書・歌く62番詞書に相当する本文を記したあとに余白をもうけ、そこで一面が終わって丁移りがある様態をしめしていること、

② b断簡は、実践本の63番詞書く65番の詞書に相当するものであり、かつ右端に余裕のない切り方をされていること、

などによって、

a・bは一枚の料紙の表裏であろう。ところがa・bがびつたりと重ならない部分があり、その重ならない部分——脱落した二行（一首）は別に切り放たれたものであり、定家切の本来の冊子『定家自筆本X』は、十行書きであつたということになるのではなからうか。（傍点「旧稿」のママ）

という推論を提示した。さらに、

③ a断簡の「つれく」とが古本系にない歌であること、

④ b断簡の「たへなりや」の歌は、古本系では付載「日記歌」の一首であること、

の事実とおして、定家切は現存「定家本」系統の本文とまさしく重なり合うのであり、つまり、これは「実践女子大学本と『定家自筆本X』との距離をより近づける」結果となる。これらを踏まえ、

実践女子大学本が奥書のいうとおりに「不違一字」の書写であるとすれば、そこから遡源しうる書本『定家自筆本Y』は『定家自筆本X』とは異なる本であつた。ただ、そのように想定するにしても、X・Y間に表記の差こそあれ、本文としてはそう大きな相異があつたようにも考えられないことになる。

という見解を仮設してみたのである。

南波浩は、前掲『紫式部集の研究』のなかで、定家切を「枅形一面七行書き」（前引）としていたが、現在確認しうる断簡で「枅形」のものは見あたらない。小松茂実が「料紙の寸法は、たて一九・九センチメートル、よこ一四・一センチメートル（図版145）。他も大同小異である」（四〇四頁）というように、『古筆学大成』未掲載の断簡もふくめて、現状で枅形の断簡は存在しない。南波の証言は誤認ないし誤記であつたか。これも「旧稿」に記したように、現状では一葉七〜八行しか残されていない断簡であっても、本来が十行書きと推定されるならば、『定家自筆本X』は枅形本であつた可能性が高い。

しかし、右の推論は、実践女子大学本が枡形をしており、なおかつ定家本の「双紙の勢分本の如く」と標榜していることを意識しすぎたの、性急な物言いであつたかもしれない。——というのは、今回あらたに検討をくわえることになった、c断簡があるからである。「写真1」（本誌五頁）は東京古典会の目録に掲載されたものであるが、「枡形」ではないものの、南波のいうとおり「七行書き」であり、実見したところでは、料紙の寸法も『古筆学大成』その他に示されたものと「大同小異」であつた。しかも、「旧稿」の推論にとつて都合がわるいのは、実践女子大学本67番に相当する詞書と和歌のみが書かれており、右端も左端も余白があつて、いかにもこの一面で完結しているかに見えるところなのである。

結局、現在の状況から、ほぼ確実だといえるのは、南波浩の四点の指摘（本誌三―四頁）のうち、（3）の「枡形」は誤認もしくは誤記であり、その他は額面どおり受け取つてよからう、ということである。とすれば、さらに付け加えるならば、稿者が「旧稿」で指摘した『定家自筆本X』と『定家自筆本Y』との関係が、定家における『古今集』『後撰集』などの勅撰集の写本間のそれに比しても、かなり近い距離にある本文であることは再確認しうるものの、「枡形」に固執した点については一定の留保が必要かもしれない、ということでもある。

なお、次頁に掲げた〔写真3〕は文芸資料研究所に蔵する、伝定家筆紹巴切の一葉である。

夜ゐに女にあひてかならすのちにあはむとちか

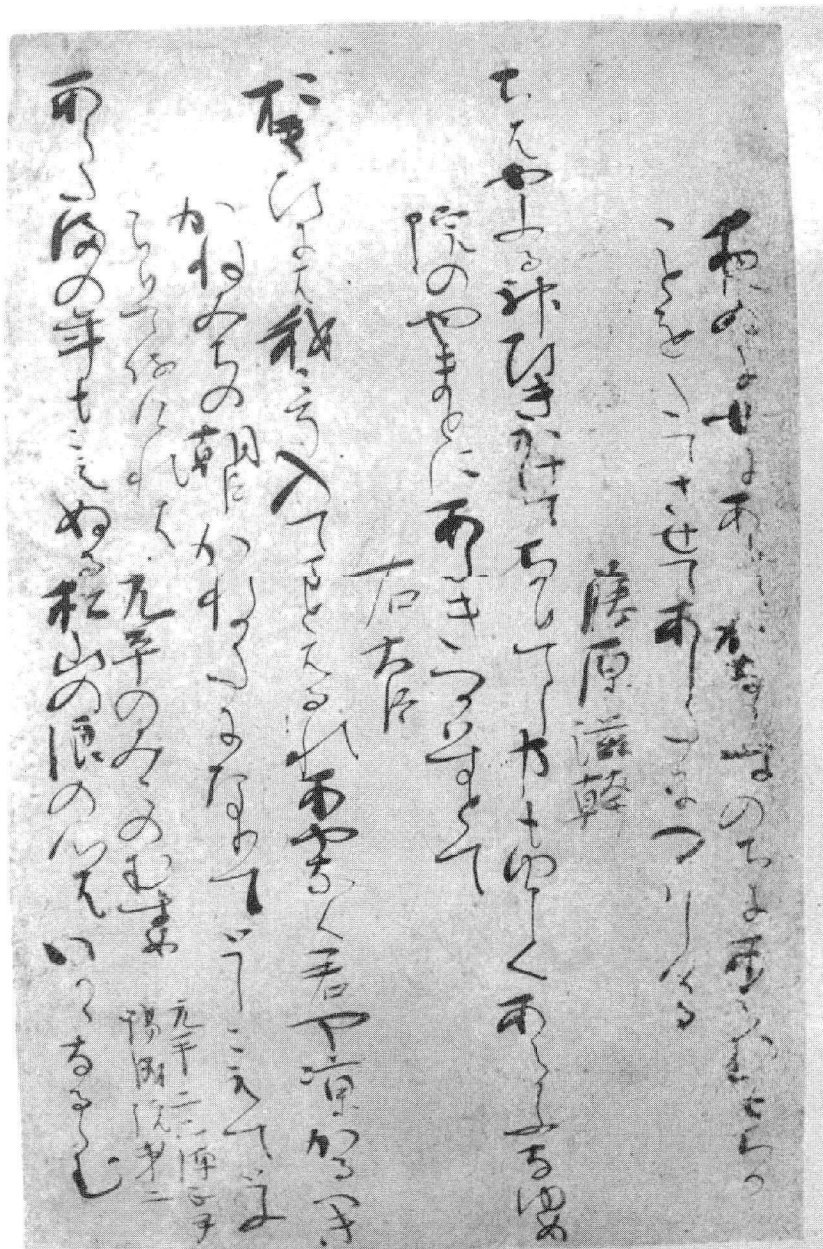
ことをたてさせてあしたにつかはしける

藤原滋幹

ちはやふる神ひきかけてちかひてし事もゆかしくあらかふなゆめ

院のやまとにあふきつかはすとて

〔写真3〕 文芸資料研究所蔵「紹巴切」



右大臣

おもひには我こそ入てまとはるれあやなく君や涼かるへき

かねみちの朝臣かれかたになりてとしこえてとふ

らひて侍ければ

元平のみこのむすめ

元平二彈正尹
陽成院第二

あらたまの年もこえぬる松山の浪の心はいかゝなるらむ

『後撰集』巻一一・恋三の巻末ちかく、天福本の七八一―七八三番の本文である。

各地に点在する紹巴切であるが、伝称ではあるものの、ほぼ定家筆とみて支障がない。これと『紫式部集』断簡と比較すると、共通点を見いだすことと少なくない。たとえば、図版は省略するが（「旧稿」を参照されたい）徳川美術館蔵のe断簡のうち、3行目―8行目を比較すると、

なかしまの松のねにさしめくる

ほとおかしく見ゆれば

くもりなく千とせにすめる水のおもに

やとれる月のかけものとけし

御いかの夜とのゝうたよめとのたま

はすれは

など太字にした部分などの共通点はあきらかである。紹巴切の方がやや速筆であるかに見えるし、字体もやや小ぶり

であり、『紫式部集』切の字母の用いようのゆたかさ、ゆとりのごときを感じさせる筆勢を見くらべると、『集』切は壮年期の書写と見るべきか。小松茂実は、『大成』においてこう指摘する。

生涯、古典の書写に異常な情熱をそそいだ定家の写本の数は、はかり知れない。『古今集』や『後撰集』などには、貞応・嘉祿・寛喜・天福（一二二二―一二三四）などの年紀を記したものが残っている。これらは、すべて六十代から七十代にかけての筆跡である。それらには一様に、老人性の白内障や中風による筆端のふるえがあらわれている。これらはまた、一面において枯淡の味わいでもあるのだが、ところが、この「紫式部集切」は、たっぷり墨を含んだ豊潤な筆致である。点画にも、力強いたくましさを感じる。となると、前記の一群よりも、もう少し早い時期の執筆で、おそらく五十代ころの揮毫ではないか。

いま定家筆跡の通年資料としては五島美術館図録『定家様^①』を超えるものがないが、それを参観してみても、小松の指摘はほぼ順当といえそうに思える。

文芸資料研究所蔵の紹巴切は〔写真3〕のごとく一〇行書きだが、『平成新修古筆資料集』所収の田中登蔵断簡は『後撰集』巻一四・恋六の一葉だが、一一行書き。田中が指摘するように、紹巴切の特徴のひとつは「一面の行数は九十一行と不定」なところである。現存『紫式部集』断簡が六十八行と不定であるところも似ているといえるかもしれない。

定家切の存在は、実践女子大学本『紫式部集』と平行しつつ、その形態が鎌倉初期にさかのぼりうることを示したわけだが、定家本系本文内部の問題は右にみてきたとおりであるし、古本系本文とどう切り結ぶのか不明な点が少ない。なお、稿を継いでゆく必要があろう。

- (1) 横井孝「形態と伝流から『紫式部集』を見る」(『中古文学』第八五号、二〇一〇年六月)。以下、単に「旧稿」という場合、この稿を指すこととする。
- (2) 南波浩『紫式部集の研究』校異 篇 (笠間書院、一九七二年九月刊)。
- (3) 伊井春樹「定家筆紫式部集切と大式高遠集切」(『日本古典文学会々報』第九七号)。
- (4) 『古典籍展観大入札会目録』(東京古典会、二〇〇八年一月)。
- (5) 『特別展「源氏物語の一〇〇〇年——あこがれの王朝ロマン」』(横浜美術館・NHK・NHKプロモーション、二〇〇八年八月刊)。
- (6) 開館65周年記念／源氏物語一〇〇〇年『特別展 国宝紫式部日記絵巻と雅びの世界』(徳川美術館、二〇〇〇年十一月刊)。
- (7) 徳川黎明会編『徳川黎明会叢書・古筆手鑑四』鳳凰台・水 墨 集 古 帖 (思文閣出版、一九八九年三月刊)。
- (8) 『秋季特別展 彩られた紙 料紙装飾』(徳川美術館、二〇〇一年一〇月刊) 一八四頁。
- (9) 前掲注(3) 稿。
- (10) 小松茂実『古筆学大成』第十九卷(講談社、一九九二年六月刊) 四〇四頁。
- (11) 『特別展「定家様」 五島美術館展覧会図録No.1〇七』(五島美術館、一九八七年二月) 第二章「定家の筆跡」。「定家書風変遷表」など名兄耶明の労作による必見の資料である。
- (12) 田中登編『平成新修古筆資料集・第五集』(思文閣出版、二〇一〇年九月刊) 一三六―一三七頁。